
宗教心理学研究会ニューズレター

第9号 2008.10.15

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集1:「科学研究における信仰の機能」国際シンポジウム	1
情報科学と向き合う宗教:「科学研究における信仰の機能」国際シンポジウムの記録	
----- 荒川 歩	2
国際シンポジウムに話題提供者として参加して	高木宣秀 3
研究と信仰:通訳の目から	葛西賢太 5
『国際シンポジウム』を通じて	太田俊明 7
特集2:「宗教と社会」学会第16回学術大会テーマセッション「宗教心理学を考える」	9
私にとっての「宗教学者」というアイデンティティ―「宗教と社会」学会テーマセッションを終えて―	
----- 安藤泰至	9
「宗教心理学を考える」テーマセッションに参加して	堀江宗正 11
テーマセッションを終えて	西脇 良 12
「宗教心理学を考える」:指定討論「心理学から」	齋藤耕二 14
感想:二つの宗教心理学を統合することはできるのだろうか。	齋藤耕二 16
テーマセッション指定討論概要および若干の感想	深澤英隆 18
宗教心理学研究会テーマ・セッションに参加して	中野美加 20
事務局からのお知らせ	21

特集1:「科学研究における信仰の機能」国際シンポジウム

2008年6月14日(土)に開催された「科学研究における信仰の機能」国際シンポジウムについて
企画者、話題提供者、通訳者、参加者の方々にシンポジウムの感想をご執筆いただきました。
今回はシンポジウム報告を掲載しないため、シンポジウムの内容にも触れていただきました。

情報科学と向き合う宗教： 「科学研究における信仰の機能」国際シンポジウムの記録

荒川 歩(名古屋大学)

アメリカの一部の学校において、進化論を否定し、天地創造を肯定する教育をしているというニュースを、目にすると、多くの日本人は、「非科学的だ」と思うかもしれない。しかし、このことは、我々にいろいろなことを考える契機を与えてくれる。多くの日本人が信じている進化論だって、多くの人は、「科学者が知っているから」信じているにすぎないんじゃないの？意味のある真実は科学以外にないの？脱宗教化した科学って論理的には「普遍的」だけドリアリティがなくなったりしないの？他の信仰の人と知識を共有したり、視点を交換したりできるの？できないの？宗教が科学研究に与えるポジティブな影響ってないの？

2008年6月14日に行われたシンポジウム「科学研究における信仰の機能」(企画：松島公望(東京大学))は、ドイツの著名な情報科学者であり、また信仰者でもあるWerner Gitt先生(元・ドイツ連邦物理学・科学技術研究所所長)を話題提供に迎えて行われた。日本からは、心理学者であり、また仏教の僧侶でもある高木宣秀先生(龍谷大学文化研究所)が、同じく話題提供として、そして、臨床心理学者であり、宗教学にも造詣が深い森岡正芳先生が指定討論として登壇した。

会場である名古屋大学ベンチャービジネスラボラトリーのベンチャーホールには、朝10時という早い時間帯にもかかわらず、20

人を超える人が参集した。Gitt先生のお話は、著書「初めに情報ありき 情報—自然と科学を理解する鍵」をもとに、進化論の誤りを情報科学の視点から指摘したものであった。講演では最初に、「科学の基本原理」、「自然法則」、「情報」の特徴についてそれぞれ整理した後、情報の科学的定義を行い、情報における自然法則(物質の特性はない・情報は知的な発信者のみが創作できる、他計4つ)を紹介した。これらの定義に基づき、生物のDNAを検討してみると、生物システムを形成するDNAは、情報と呼べるものであり、よって知的な発信者によって発信されたものである。よって無神論では成り立たないと結論付けられた。

第2の報告者である高木先生は、ご自身の立場やご発表の限界について、慎重に述べられた後、渡辺(1998)を引用して、現代の一般的日本人の宗教と進化論をめぐる状況を紹介された。続いて、日本への進化論の導入時の状況について、E・S・モースの手記「日本その日その日1」(1970)をもとに紹介し、日本では、進化論があまり抵抗なく、受け入れられた様子であるとまとめられた。その後、仏教の世界観と科学の関係について解説され、仏教では、その世界観と科学とが衝突することがあまりない様子であることを報告された。最後に、宗教は、科学研究に影響のを与える、多くのバイアスの一つである可能性を指摘され、そこから科学研究が

影響を受けないために必要なことや、積極的にバイアスを受け入れることが有用である場合もあることが紹介された。

これらの両発表に対して、森岡先生が指定討論を行った。Gitt先生の報告に対しては、Gitt先生は、情報を、非物質的なものであるとしているが、表現的なものが、突破する力のように、直接的な宗教体験のようなものをどのように考えるのかについて質問された。他方、高木先生の報告に関しては、仏教が情報科学に対して差異と反復をのりこえる視点を提供する可能性についてなど

コメントがなされた。

司会の荒川(名古屋大学)の下手際もって、フロアからの質疑の時間は限られてしまったが、葛西賢太先生(宗教情報センター)が通訳の労を取って下さり、情報の定義についてや、科学と倫理の関係など通訳の難しい内容にも関わらず円滑に進んだ。わずか2時間の会であり、何か最終的な結論に至るものではなかったが、様々な論点が提出され、さまざまな発想が浮かんだ会であったと思われる。今後も様々な形で議論が継続することが望まれる。

国際シンポジウムに話題提供者として参加して

高木宣秀(龍谷大学仏教文化研究所)

2008年6月14日午前、名古屋大学のベンチャーホールにおいて開催された、宗教心理学研究会主催の「科学研究における信仰の機能」の国際シンポジウムにおいて、筆者は、「心理学徒と仏教僧侶の関係—その実践における課題—」という題目で話題提供を実施しました。本稿では、話題提供の概要と感想を、とのお話であり、簡単にご報告させていただきます。

当初、心理学の研究と仏教僧侶の関連から話題提供を、という趣旨のお話を頂いた際は、お話を頂いたことへの感謝と同時に、本シンポジウム全体としては筆者の心得のない分野も多分に含まれているため、躊躇もしました。

まず、話題提供の概要についてですが、当日の筆者の話題提供では、最初に荒川歩

先生の企画趣旨、松島公望先生の企画趣旨にふれ、なるべくそれらに合致するように話題提供内容の作成を試みたことを述べました。次に、筆者の科学的立場と宗教的立場について事前に検討し、筆者は心理学を専門とする研究員であり、また仏教僧侶でもある、といった立場と範囲において、この話題提供を行う旨を述べました。

次に、Werner Gitt先生の話題提供内容との関連と対比ということで、日本における進化論をめぐる状況について、いくつかの文献を引用し、簡単にふれました。

また、これに少し関連した話題として、仏教と科学の話題をめぐる、仏教の世界観などについても、いくつかの文献に基づいて、簡単に紹介しました。

以上の話題のあと、表題テーマに関連し

た話題に入りましたが、科学研究に影響を与えるような無数のバイアスや、宗教関係の研究を実施する際の留意点として考えられることについても、いくつか検討を行い、研究にあたっては、誰もが何らかのバイアスを受けていることの自覚の必要性和、それらへの方策などについて検討しました。

それらをふまえて、科学と宗教における研究上の課題について、特に筆者の場合に範囲を限定し、心理学と仏教をめぐる研究上の課題について言及しました。内容的には、仏教徒が心理学の研究を行う場合、心理学の研究において仏教からの影響をどのように考えるかについて簡単に検討することとし、まず心理学に仏教など他のバイアスを入れないように試みる研究方向性を検討したのち、これとは反対に、仏教を現代心理学的に研究する方向性についても、いくつか検討を行いました。

最後に、科学者であり仏教者でもある場合においての、実践における課題を検討し、科学研究から実践仏教への影響、また反対に、実践仏教から科学研究への影響について、簡単に検討を行いました。筆者の話題提供の概要は以上です。

本シンポジウムにおける、Werner Gitt先生の話題提供においては、Gitt先生は情報科学者として、またクリスチャンとして聖書に基づく立場からご自身の研究を述べられ、

筆者の知らなかった理論を拝聴させて頂きました。Gitt先生からはご自身の研究テーマへの熱意を感じ、筆者と立場の違いはあるものの、ライフワークとなり得るテーマを見出すことの大切さも感じられました。

また指定討論の森岡正芳先生は、まずGitt先生の話提供に関するコメントを述べられた後、仏教と心理学の接点についても諸方面からコメントを述べられ、全体として宗教心理学に関心がある人々にとって研究への動機づけが豊かになるようなコメントをして下さいました。

シンポジウム終了後、晴天の空の下、最後まで残られた先生方とともに、Werner Gitt先生とご同行の先生方を地下鉄の駅までお見送りしました。あたたかく親切な先生方でありました。

なお、国際的な場や学際的な場では、否が応でも、自然に、自らの立脚点やアイデンティティを問われますが、今回の話題提供の準備にあたっては、科学的立場や宗教的立場なども明確に整理する必要があると思われ、それらを試みるに至りました。

最後になりましたが、本シンポジウムにおいては、多くの先生方にお世話になりました。特に、準備段階から、松島公望先生、荒川歩先生、葛西賢太先生には、大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

研究と信仰:通訳の目から

葛西賢太(宗教情報センター)

6月14日の午前、「宗教と社会」学会の直前の絶妙な時間に、国際シンポジウムが設けられました。私・葛西は、討論の通訳という役を頂きました。

講演者はドイツから来られたWeiner Gitt先生と、龍谷大の高木宣秀先生でした。神戸大の森岡正芳先生がコメントをされました。葛西はGitt先生のお話の途中から通訳をはじめたと記憶しています。

ここでは、概要と私の感想に若干の補足をを行い、通訳準備について一言述べさせて頂きます。

ギット先生は熱心なクリスチャンで、情報科学の観点から、進化論の問題点を指摘し創造説(Intelligent Design)の意義を示す、という話をされました。さまざまな生命を作るために超高密度な情報がDNAには埋め込まれており、この情報の「送信者」を推定すれば、人間の知を遙かに超えた存在(=神)によって生命が創造されたことの論拠となる、というものでした。彼の著書In the Beginning was Informationは最近邦訳され、いのちのことば社から『初めに情報ありき』というタイトルで出ています(写真参照)。「進化論を批判する科学者がいるなんて!？」と日本では思われるかもしれませんが、この点について補足しておきましょう。米国サンディエゴにある創造説博物館というのを訪ねたことがあります。ここでは「神による世界創



造の七日間」の様子が展示されています。「この世界が神によって創造された」という前提に立つと人類史をどうとらえられるかがよくわかりました。自然科学者ではない立場から見れば、「なるほどこの前提に立てばこういう議論は一応可能だな」と納得させられるものがありました。米国にはこのような創造説博物館がいくつもあり、創造説の教科書も出ています。ドイツにもこの立場の方がおられたのだと興味深く思いました。

なお、ギット先生は今回の来日で40以上の講演をしたそうです。事前に先生の英語になじんでおきたいと、他の講演(同内容)について調べてみたところ、申込時に所属教会を問われるなど、一連の講演が熱心なクリスチャンの方を対象としていることがわかりました。私は創造説に与しませんし、講演の結論には賛成しませんが、しかし興味深い講演でした。

ついで高木先生のお話を紹介しましょう。児童発達心理学者である先生は僧侶でもあり、研究上は客観的な姿勢を貫いているが、時として仏教的な考え方がでるかもしれない、自分にとって仏教と科学研究とはそのような形で共存している、と語られました。(ギット先生の草稿から進化論が話題になることが予想できたので)明治期のお雇い外国人モース(大森貝塚とか発見した人です)が東京の諸大学で進化論を講義した際の手記を話題として出されました。モースは進化論者で、米国などと異なり進化論・創造説について論じても論争にならず、興味深げにノートをとる日本人の姿に感銘を受けたということでした。モースが進化論者であるためこの手記には偏りがあるかもしれませんが、と高木先生は留保されます。そして、仏教でも世界創造に触れたテキスト(アビダルマコーシャ)があることを指摘され、それにもとづいて作られた世界模型(須弥山儀)の写真を示されました。

ギット先生と高木先生のお話はかなり角度が違うので、討論として突き合わせるのは、時間的にも内容的にも無理でした。しかし、両方をそれぞれの聴衆の立場に引きつけて聞くと、なかなか面白い組み合わせでした。ギット先生の講演内容は宗教的言明と科学的説明が合わさったものですが、お人柄はとてフレンドリーです。高木先生は、自他の諸研究に対する慎重で静かな態度の中に、科学者としての姿勢プラス僧侶としてのたしなみを見たように、私は思いました。

コメントは森岡先生です。私には記録する

余裕がなく、自分が訳しておりながらほとんど記憶に残っていません。印象に残ったやりとりを一つ紹介します。森岡先生が問うた中に、ギット先生が進化論と創造説のあいだにもいくつかの選択肢があるがそれらの存在は認めるのか(もっとソフトな言い回しをされたのですが)という問いに、ギット先生は、もちろん認めていますと答えられたことです。著書を読ませてもらい、もう少し時間があれば、こうしたいいない部分についても話せたところが残念に思いました。森岡先生の質問の微妙な表現を訳す力が私にあればもっとよかったですよ。

二つのスクリーンを用い、大きいスクリーンはプレゼンテーション、小さいスクリーンには日本語訳が乗りました。今回はその場で訳を入力されていたので講演に追いつくのに大変でしたが、事前に準備しておけば問題ないでしょう。すばらしいアイデアです。動員に関しては、今回の学会にも告知して、参加者が立ち寄ってもらえるように動員する手もあったでしょう。

最後に事前準備について。予備知識が心配でしたので、あらかじめ松島さんに、二週間前の6月頭には全員分の発表原稿(草稿)をとお願ひしておきました。原稿などに目を通し、見慣れない単語や重要そうな単語を意識して確認しました。幸いにして、先生方がよく練られ整理された原稿を用意くださったので、準備は楽でした(脱線の多い方だと、枝葉をばさばさと切っていくしかありません)。

三人の先生方および企画をされた荒川さん、松島さんに改めて感謝申し上げます。

『国際シンポジウム』を通じて

太田俊明

途中から入ったので、この会の全体像は十分に把握できなかったことを先ずはお詫びしたい。また内容の要点等は他の方が述べられると思うので、私自身としてはこの会を通じて考えさせられた点と展開について述べるに留めたい。

自分自身の立場としては現役の仏教僧侶であり、且つ教団所属の研究者であるので、特定の教学の影響下にあることを理解したうえで話を展開していきたい。

(注:本文では引用に関して「」で表記するものとする。)

仏教とは仏になるための教えであり、その表現は多様性を極める。一例を出せば、本願を(知的だけでなく身体・霊性的に)領解し魔悪修善すること。即ち「仏の教えと出遭うことで心意識がひるがえり生き生きと生かされる」ことを旨とする。本願領解のために、念仏や真言(例:阿字観)禅といった行法・儀軌を修する。ゆえ、科学ですら仏の立場から見れば行の一つであり、「科学≠仏」となり「科学<仏」となる。

この立場から「科学研究における信仰の機能」の意義を鑑みるならば一方は心理学もう一方は情報工学という立場の違いはあるが、研究方法に対する考え方、哲学(基本原理)の確立が重要であること。また、研究的に考えるならば「科学→宗教」と「宗教→科学」(この場合の「宗教」とは単なる教団や教学ではなく「宗教の本質」を指す)のアプローチがあるが、究極的にはギット氏が語った

所での「聖書は完全に答えを与える」と言うように、一切は神仏から与えられ、言葉から発されたものと受け取って過言なかるうか。

国際シンポジウムを通じて、考えさせられたことは以下の3点である。

1. 仏教者(心理学専攻)とキリスト教(科学技術論)で対論し、研究方法に対する考えや基本原理の確認を志向したこと自体意義はある。しかし東洋、特に日本には仏教のほか道教・神道(さらには旧琉球にはユタ信仰。アイヌ民族には民族としての信仰)等があり、それらの観点からの考察も必要ではないだろうか。今回の場合、「西洋のキリスト教、東洋の仏教」という考えがベースとなっている。しかし現実的な志向としては仏教とキリスト教と言った観点だけではなく、神道や他宗教との対話も考えた上で考察も試みられている。したがって今後はより多くの宗教的な立場からの対話が必要ではないだろうか。

2. 高木氏の論の中で「日本の一般的な仏教徒は仏教思想と科学を区分して認識しているように思われる」という部分がある。この点に関して自分は2つの考えがあり、表面的には理解できるものの、深層としては真言の十住心論、天台の開会思想、西山浄土の観門論等の影響から「科学も仏の掌の中」というように考えられるのではないかと。

3. ギット氏の論の中で「人には、非物質的な要素がある(霊)」とあるが仏教においても「仏性」や「本願」等と言った概念がありそれ

らが氏の言う「霊」にあたるのではないか。そこからの対比試論を構築することは理論的・実践的にも可能であるように考えられる。

以上を踏まえて、今後管見の限り考えられる展開として以下の6点を挙げておきたい。

1. 宗教の垣根を越えた宗教と科学，特に心理学との対話。宗教心理学研究会であるので両者の際どい境界までアプローチすることが可能ではないだろうか。先述した「本願領解と宗教的廻心」と「回心」とが同一か否か。更にはそれらの源泉があるのか否か，等について宗教的な立場においてより多様な角度から確認し，実感し，味わうことが肝要となるのではないだろうか。

2. その際理論的・実践的に会通することを目指し，ストリートレベルでの動きを中心に行ずる事が近道になるのではないだろうか。それゆえ，形から入っていくことと行法の意義の確認と考察からスタートするものと考えられる。

3. ただ，特定の教学的観点からの判釈を入れることを一旦は避ける必要もある。教学はあくまでも行法や祖師のライフコースに基づいた言語表現かつ理論であり，言説の解釈の異なりに過ぎないからである。要は相手の枠を知り・領解することが大事ではないだろうか(仏教で言う「一水四見」)。

4. 宗教と心理学の対話を通じて科学技術全体にどのような影響が与えられるのか。この

点に関する宗教心理学的考察が鍵になると考える。現在の日本における『第三次科学技術計画』は4つの最重点分野と4つの重点分野の8つから構成されているが，そのいずれにしても人文社会科学分野の視点の欠如について反省的観点に立脚し，重視していこうとする傾向が見られる。特にライフサイエンス分野ではこの傾向が顕著である。しかしながら韓国の科学技術計画の重点分野として文化科学を挙げていることや，欧米での人文科学重視の姿勢に比べれば，如何だろうか。

5. また，メディアや教育との問題も現代社会において重要なものである。従来メディアと宗教の問題はいくつかの論考があるものの，そこに心理学的な観点から立脚していたものはどれだけあるだろうか。また逆も然りである。国内的に一例示せば，「憲法20条」・「教育基本法15条(旧条文9条)」・「科学技術基本法1条」等々でのバリアをどのように考察していくのかも課題として挙げられる。

6. 遵って，他の諸科学と孤立せず且つ取り込まれないで，上述した「一水四見」の観点で他の要因を含め複雑に絡み合いを行えば，宗教心理学は発展していくと考えられるのですが…。

箇条書きみたいな状況になりましたことをお詫び申し上げます。又，最後になりますが，国際シンポジウムを主催されました皆様に御礼申し上げます。

特集2:「宗教と社会」学会第16回学術大会 テーマセッション「宗教心理学を考える」

特集2では、2008年6月15日(土)に開催された「宗教と社会」学会第16回学術大会テーマセッション「宗教心理学を考える」について話題提供者、指定討論者、参加者の方々にテーマセッションの感想をご執筆いただきました。特集1と同様に今回はテーマセッション報告を掲載しないため、各自の話題提供、指定討論の内容についてもまとめていただきました。

私にとっての「宗教学者」というアイデンティティ —「宗教と社会」学会テーマセッションを終えて—

安藤泰至(鳥取大学医学部)

私の現在の研究はいろんな学問領域(宗教哲学・宗教心理学・生命倫理学・医学哲学・死生学)にまたがっているのです、よく「何が専門かわからない」などと言われることがあるが、自分ではもっぱら「宗教学者」だと意識しており、そのように名乗っている。今回、このテーマセッションで「宗教学的な立場から宗教心理学を考える」という課題を与えていただいたことで、自分のスタンスを改めて確認する機会が得られたのは有難かった。私はここ2、3年の間に、「スピリチュアリティ」をめぐる論文を二つ発表した(「越境するスピリチュアリティ」、『宗教研究』349所収、「「スピリチュアリティ」概念の再考」、『死生学年報2008』所収)。そこで私は、「スピリチュアリティ」についてのさまざまに異なった言説を整理、分析すると同時に、そこに共通する背景を見出し、個々の領域に閉じられがちな「スピリチュアリティ」概念をお互いに擦り合わせ、開いていくための展望を述べたが、いわゆる「スピリチュアリティ」や「スピリチュアル」を直接に語り、唱道する人た

ち(研究者を含む)とも、「スピリチュアル」ブームを(多くは批判的に)外側から分析する人たちとも異なった一つの立場を提示しえたのではないかと思っている。

今回のテーマセッションでは、「心理療法とスピリチュアリティ」に焦点を当てることで、宗教学から「宗教」や「心理学」がどのようにとらえられるのか、そしてまた、当の「宗教学」自身の営みがどのようにとらえられるのか、という問いの形で、宗教学的宗教心理学の一つの立場を示すことを試みた。一方で心理療法や臨床心理学の内部で「スピリチュアリティ」が問題にされることが多くなっており、これは「スピリチュアリティ」を語る人々についての私の分類の中では第一のグループ(医療・福祉・教育などヒューマンケアに関わる専門職の人々)に当たる。他方、心理療法そのものが伝統宗教とは異なった現代のスピリチュアリティ運動の一つとして分析される場合もある(宗教社会学者を中心とする第二のグループ)し、心的な病いや障害の「治療」を超えて魂の「成長」や「完成」を

目指すような心理療法は、「スピリチュアリティ」を語る第三のグループ(ニューエイジ・新霊性運動)との親和性も高い。私の発表の目的は、「心理療法とスピリチュアリティ」という問題をこうした「スピリチュアリティ」をめぐる多様な言説のなかに置き直し、それについて内側から語るのでもなく、外側から分析するのでもない、別の見方を提示することにあった。

私が「スピリチュアリティ」について論じたのはここ最近のことだが、実は、京大の大学院生だったころ(20年以上前)から、自分のやりたい宗教学というのは「宗教」の研究ではなく「スピリチュアリティ」の研究なのだ、という意識をもっていた(なので、最近の「スピリチュアル」ブームはけっこう迷惑である・・・)。心理学畑の人たちは「宗教学」というと、宗教現象そのものを対象として研究する実証的宗教学を思い浮かべる人が多いと思われるが、(前にもこのニューズレターに書いたことがあるように)京大の宗教学の伝統というのは「宗教哲学」であり、ほとんどの人がやっている研究は実質的には哲学史研究(たとえばカントやハイデガーの哲学、西田哲学の研究など)が主体である。そういう研究室のなかで、フロイトの思想を研究対象としていた私は、一方ではなぜフロイトを「宗教哲学」ないし「宗教思想」としてとらえるのかということについて、もう一方では、なぜそうした思想を研究することが「宗教学」や「宗教研究」になり得るのかということについて、自他に対して申し開きをしなければいけ

ないという(少々過大なほどの)意識をずっと持ち続けてきたように思う。

このことは、私がここ10年近く関わっている生命倫理や医学哲学の問題へのアプローチの仕方にも影響している。すなわち私は、生命倫理などにおける個々の問題に対して答えを与えるというよりは、そうした問題を論じる際に人間の生と死におけるスピリチュアルな次元についての認識が十分生かされていないことを指摘し、問題の論じられ方そのものを批判していくという方向をとっている。私は、「宗教学者」が生命倫理の問題に対してどのように関わることができるのか、ということを常に問い続けることで、「生命倫理学者」になってしまわないということを自らに課しているのかもしれない。

そういう意味で、「スピリチュアリティ」をめぐる研究は私にとって、自らが宗教学研究を志した原点に立ち戻りつつ、これまでの自分の二つの領域での研究(「宗教と心理学」の研究と生命倫理・医学哲学の研究)の間の橋渡しになるものとして要請されてきたように思えるし、それとともに、私の考える「宗教学」が全体としてどのようなものであるか(大げさに言えば「安藤宗教学」のようなもの)の輪郭が少しずつ見え始めてきたようにも感じる。

このような機会を与えていただいた松島さんはじめ、いろいろな刺激をいただいた提題者およびコメントーターの方々に深く感謝します。

「宗教心理学を考える」テーマセッションに参加して

堀江宗正(聖心女子大学)

今回、テーマセッションに参加する際、私は宗教学の立場から宗教心理学を考えるという役割を担った。今回、とくに自分に課したのは、宗教心理学を外側から分析するのではなく、宗教学として主体的に取り組む可能性をさぐるということである。以下、発表の内容を要約し、発表後の感想を加えたい。

本発表は、宗教学の立場から、(1)宗教心理学のあり方について類型論的に振り返り、(2)今後の日本における研究の可能性をさぐることを目的とした。

これまでの宗教学的な宗教心理学は三つに分類され、それぞれ問題点と可能性をばらむ。第一の「宗教的象徴の心理学的解釈学」(宗教の心理学)は、心理学理論の恣意的援用と還元主義に陥りかねないが、適用の正当性の論証と、宗教というフィールドにおける理論の批判的検証をおこなうならば、宗教学として実践可能である。第二の「宗教心理の学際的研究」(宗教心理の学)は、現状ではそれぞれの議論の寄せ集めであるが、「宗教心理」なるものに関する共通了解の醸成、それに該当する先行研究の再評価、研究のモデルの提示をおこなえば、学としての形を成すであろう。第三の「宗教と心理学の関係性の研究」(宗教と(しての)心理学)は、形式的には宗教心理学の学説史、思想史、知識社会学であるが、理論宗教心理学や批判的宗教心理学として位置づけることは可能だろう。

これらは心理学の立場から見れば周縁的

なものに見えるかもしれないが、心理学的な宗教心理学に対する批判的含意を読み取ることもできる。すなわち、数量的なデータ化、人文社会系の「心理」現象に関わる学問的成果の軽視・無視、心理学そのものの歴史的特殊性や文化的特殊性に対する無自覚である。

一方、心理学における質的研究への注目は高まりつつあり、「量的な宗教心理学」と「質的な宗教心理学」という分類が、宗教学と心理学の区別とは独立に成り立ちうる。

また、文化現象を対象とする質的研究は、心理学と社会学の境界線を流動化させる可能性がある。それは、とくに宗教社会心理学の領域において目立っている。研究対象に着目しても、両者の境界線は流動的で、宗教の心理的側面は、宗教の社会的側面とは切り離せない。もはや研究対象の独自性に、宗教心理学のアイデンティティを求めすることはできない。「宗教」の心理的側面を特権化することは、宗教を私的な信念に閉じこめる近代西洋的な宗教概念を自明視し、強化することでもあり、「宗教」の一面化につながるだろう。

無宗教と呼ばれる日本人の宗教性を研究対象とする際、スピリチュアリティは無視できない切り口である。「宗教的回心」や「宗教性の発達」は、「無宗教」の人々には適用できない。だが、スピリチュアリティが私事化された宗教性を指すのであれば、上記の一面化をさらに進めることになる。多くの「無宗

教」の人々が無自覚のうちに実践している儀礼的宗教性を、スピリチュアリティ概念が包括するかどうかは不明である。とはいえ、儀礼的宗教性を忌避する傾向は広がっており、日本におけるスピリチュアリティは、儀礼的宗教性の個人的実践として現れる可能性もある。

以上のことから、宗教学的な宗教心理学の今後の可能な選択肢の一つとして、「日本におけるスピリチュアリティの心理社会的側面に関する質的研究」が浮かび上がってくる。それは課題として、「スピリチュアリティ」とは何かの明確化、具体的な形態への分節化、儀礼的宗教性との関係の検討を含む。また、心理学によるスピリチュアリティの理念化が大衆的レベルのスピリチュアリティとどう関わるのかを、社会学や宗教学とともに批判的に考察することも含む。理論的には、宗教体験論は、儀礼論と消費社会論を接ぎ木したものとなるかもしれない。宗教発達論は、日本人における非宗教的なスピリチュアリティの発達や人格変容を考察に含めなければならなくなるだろう。

以上、当日の発表を要約したが、発表原

稿では曖昧だったり混乱したりしていた部分を多少訂正している。私はこれまで、宗教心理学を研究対象として外部から見るというスタンスをとってきた。だが、宗教学として宗教心理学を「きちんと」実践することはできないかと、つねづね思案していた。今回の発表は、その「思案」をまとめたものである。と同時に、一つの約束として、今後の自分の研究を縛ることもなったわけである。

心理学側から出てきた発表、とくに高橋氏のものは、自分の発表と響きあっているように思われた。それは、私が、宗教学的な宗教心理学が持つ、心理学的な宗教学への批判的含意と呼んだものに関わるものであったと記憶している。活発なディスカッションを経て今、「宗教心理学」という名前にこだわる必要があるのかということ、痛切に感じている。だが、それ以上に適切に自分たちの研究実践を表現する言葉が見つからないうちは、この言葉はなおも機能するのであろう。しかし、そのような心配をする前に、「宗教学的な宗教心理学」と呼べるものを充実させなければならないことは言うまでもない。

テーマセッションを終えて

西脇 良(南山大学)

このたびの「宗教と社会」学会・第16回学術大会におけるテーマセッション「宗教心理学を考える」において、話題提供の機会を与えていただいたことを、深く感謝申し上げます。

本セッションにおける筆者の役割は、いわゆる「心理学的宗教心理学」の立場から具体的な研究内容を報告することにより、全体討論のための話題を提供することであった。この場合、「心理学的宗教心理学」の典型的

研究事例が提示されることが必要であったが、筆者の力不足により、不十分な内容に留まってしまったことを反省している。ともあれここでは、発表内容および感想を簡潔に述べることにしたい。

(1) 発表内容

筆者が近年取り組んでいる研究テーマ「子どもを取り巻く宗教的環境」に関連し、2004年に筆者がおこなった調査研究(西脇, 2007)を紹介した。先行研究(西脇, 2005)において、宗教的環境を「人的環境」「物的環境」「人と物が織りなす環境」に分け、そこに4つの社会単位「家族」「学校」「地域」「情報社会」をクロスさせて環境全体をあらわす、という分析枠組みを用いたが、今回取り上げた調査では、社会単位のうち「家族」に注目し、子どもが家族(ここでは祖父母と親)から受ける、宗教にかかわってのしつけや教育にはどのようなものがあるか、また、それらは青年期においてはどのように受けとめられているのか、を検討しようとした。

具体的には、大学生に対して、幼少期の宗教的環境を訊ねる自由記述調査を実施し、その結果を整理した。さらに、見出された記述タイプ3群について、別途実施した宗教意識尺度調査の得点で比較した。

自由記述調査の結果分析から、子どもに対する祖父母や親からの働きかけとして、3つのタイプがあることが見出された。すなわち、「宗教行動に関するしつけ」「共におこなう宗教行動」「俗信や価値観の伝達」であった。これらの働きかけに対する子ども(回答者)の受けとめ方を示す記述をみると、「順方向の影響がみられるタイプ(宗教を信じる

家族の中で育つことにより信じるようになった場合と、無宗教の家族の中で育つことにより無宗教となった場合)」「逆方向の影響がみられるタイプ(宗教に対する否定的態度を形成するケース)」「慣習・伝統の継承として捉えられるタイプ(無自覚的に祖父母や親の影響を受けていくタイプ)」に分類できた。次に、先の働きかけ3タイプの記述があった回答者群と記述がなかった回答者群との間に、宗教意識尺度得点での差がみられるかを調べたところ、「宗教行動に関するしつけ」タイプにおいてのみ有意差がみとめられ、子ども時代に祖父母や親から参拝・参詣等の宗教行動を奨けられたことを記述した群は、そうでない群に比較して宗教意識が高いことが見出された。

(2) 感想

今回のテーマセッションでは、「宗教学的」と「心理学的」の二分法により宗教心理学の研究領域を整理し、主として方法論的な課題が検討された。議論のすすめ方も、まず個別具体的な研究報告がなされた後、両宗教心理学の共通点と違いが双方の立場から検討され、その後の指定討論およびフロアを交えての議論により、問題と課題をさらに深めていく、というものであった。双方のバランスに考慮しながら、複数の視点を導入しつつ問題を掘り下げていくこのやり方は、テーマセッションに参加した人々にもよく受け入れられ、一定の充実感をもたらしたのではないかと、思う。

個人的にも今回のセッションに参加して、多くの学びを得ることができた。具体的には、スピリチュアリティ概念をめぐる二重性

の問題(話題提供:安藤氏), 宗教性発達論の総合的見直しの必要性(話題提供:堀江氏), 潜在性・実用性で捉えたスピリチュアリティ概念モデルという枠組み(話題提供:高橋氏), 宗教学と心理学という質の異なった研究であっても, 理論と実証が重なり合う状況があり統合の道が開けているとの指摘(指定討論:齋藤氏), スピリチュアリティ研究における社会構成主義的な視点の必要性の指摘(指定討論:深澤氏), 宗教社会学の分野においても今回のテーマと同様の問題がみられるとの指摘(指定討論:川又氏), 等の議論を学ぶことができ感謝している。

さらに, 今回の, 二分整理法に基づいたテーマ設定により, セッションが本来求めていた方向へと動いていったことを, 印象として強く持った。宗教心理学の新たな方向性を提言された堀江氏, 心理学と宗教学の共存をキーワードに宗教心理学の可能性を提

言された高橋氏両者の発表がその原動力となり, セッション全体としてみても, 宗教心理学の可能性に目を向けることができたように思う。

研究者は, 再び現場に戻る。今回のセッションで共通理解しえたことを活かしながら, 個別に取り組んでいる研究テーマに取り組みたいと思う。さいごに, 今回のセッションを企画し, 準備された松島公望氏に, 深く感謝申し上げます。

文献

西脇良 2005 子どもを取り巻く宗教的環境 白百合女子大学キリスト教文化研究論集, 6, 72-122.

西脇良 2007 子どもの宗教性発達に及ぼす祖父母および親の影響 白百合女子大学キリスト教文化研究論集, 8, 112-140.

「宗教心理学を考える」: 指定討論「心理学から」

齋藤耕二(東京学芸大学名誉教授)

心理学というとき二つの学問領域がしばしば混同されている。一つは実験心理学と呼ばれた分野から発展した系列であり, 他方は精神障害の治療を目指した精神分析を出発点とする系列である。精神分析では基礎となる心の働きについての理論を「心理学」, ときには「深層心理学」と名づけている。両者は共に「心」と呼ばれる現象を対象とする学問領域として重なりあい, 影響を及

ぼしあう関係にあるけれども, 研究方法, 理論化の方向などにおいて大きく異なっていて異質な学問領域として現在もあり続けている。ここでの心理学的視点は前者, すなわち科学的心理学のみに限られるものであることを強調しておきたい。

他の諸科学と同じように, 心理学においても専門的分化が著しく進行してしており, 実証的研究は細分されて, 成果を体系化する

理論も限定された分野に適用されることだけが目指されている。さらにこの科学的心理学は社会科学と自然科学というかなり質を異にする学問領域に位置している。例えば生物科学、生理学などにつらなる神経心理学、生理心理学、薬物心理学と社会科学、行動科学と結びついた社会心理学と呼ばれる分野が存在している。この両端を結ぶような分野間での交流や接触はほとんどないといっても言い過ぎではないであらう。神経心理学の研究者は社会心理学の知見や理論にほとんど関心を示さないであらうが脳科学の研究成果には強い興味を持ち、その理解に積極的であると思われる。

専門とする研究分野の細分化は宗教心理学、より厳密には心理学的宗教心理学においても認められることであって、ごく限られた研究分野に妥当する理論、法則性が追求されていて、宗教心理学の全分野をカバーする理論の構築を志向している心理学研究者は存在していない。

前置きはここまでとして、このテーマ・セッションの主題である二つの宗教心理学、すなわち宗教学的宗教心理学と心理学的宗教心理学の関係についての検討に話を戻すと、宗教心理学をこの二つのタイプにわけるとは松本(1979,「宗教心理学」)に始まるとされている。この考えを引き継いだ杉山(2004,「新宗教とアイデンティティ」)は、心理学者と宗教学者の宗教へのアプローチにはズレがあって、理論化には質的な差異があることがすでに今田(1947,「宗教心理学」)によって指摘されていると述べている。宗教現象を学問的研究対象としたとき、研究者の学問的背景によって取り上げられる側面、研

究の方法論、理論化の方向などに違いが生じるのは当然のことである。

また、宗教という複雑で多面的な現象を研究対象としたときには、特に実証的研究では宗教現象の特定の側面のみを取り上げて分析するという制約を逃れることは不可能である。この意味では宗教についてのさまざまな研究が成り立つことは宗教についての知識を豊かにし、その理解を深めることに役立つことである。

宗教学あるいは心理学というのは学問領域を示す抽象的なカテゴリーにすぎないのであって宗教現象を対象とした研究のあり方を制約するものではない。ただ、松本は宗教学が実証的経験科学であることを前提としながらも感情移入、共感による内的理解を強調して、それは「冷たい事実の観察・分析にのみ終始する「客観主義」的な宗教研究の立場とは本質的に異なる」(28ページ)と言っている。心理学での宗教研究が客観的、外的理解を目指すもの、あるいはそれに終始するものだとして直接的に断定しているわけではないが、内的理解を外的理解に対比してその一方のみを重要視して他方を排除することが実証科学の方法論として妥当であるとは考えられない。

社会心理学の創生期において、社会学的社会心理学と心理学的社会心理学を対比してそれぞれの独自性を強調することが行われていた。しかし実証的研究が積み重ねられてゆくなかで次第にこのような区分は解消してしまっている。

宗教心理学が同じような経過をたどるかどうかが現状では結論することは難しいが、宗教という多面的でさまざまな水準での分析、

検討が可能な現象においてはさまざまな視点、方法でのアプローチを認め合い、もたらされる知見の積み重ねの中に統合の可能性を探るのが最も適切であろう。

今日は、宗教心理学がアメリカの文化的風土を背景として発展してきたことに触れて、キリスト教のさまざまな宗派だけでなく、仏教、神道、民俗的信仰が存在している日本は比較宗教的研究に好都合な場であることを指摘している。まったく同じ指摘が岸本(1961,「宗教学」)によってなされている。さらに「比較宗教」という古くからの用語が一般的に「宗教学」を指して用いられていると述べている。日本の社会、文化という場でなされる比較宗教では、比較に用いられる変数の選択に当たって日本の宗教的風土の特殊性を重視する必要があるであろう。

宗教研究を社会・集団水準と個人水準に

分けると宗教心理学における研究のほとんどはこの個人水準における分析に集中しているといえるだろう。

個人水準での比較宗教的アプローチは比較宗教心理学とでも呼ぶべき新たな領域を開くことになるし、またそこでの実証的研究の積み重ねの中にこれまで宗教学的宗教心理学とか心理学的宗教心理学などと呼ばれてきたものが統合される可能性が存在している。

岸本秀夫 2004 宗教学 原書房

松本 滋 1979 宗教心理学 東京大学出版会

今田 恵 1947 宗教心理学 文川堂書房

杉山幸子 2004 新宗教とアイデンティティー回心と癒しの社会心理学 新曜社

感想:二つの宗教心理学を統合することはできるのだろうか。

齋藤耕二(東京学芸大学名誉教授)

二つの宗教心理学、すなわち「宗教学的宗教心理学」と「心理学的宗教心理学」が存在しているという指摘は松本(1979)に始まるとされている。この二つは、「同じ宗教の心理的側面・次元の研究」にたずさわる仕方の二つの方向であると述べられている。この考えは杉山(2004)に引き継がれて、さかのぼれば今田(1947)が、その「宗教心理学」の中で「心理学者の宗教心理学」と「宗教学者の宗教心理学」にわけたことに相当していると述べられている。宗教心理学にこの二つの

タイプがあるならば、両者の間にどのような違いあり、またどのような関係があるのかは宗教心理学に関心を持つ研究者には見過ごしできない問題である。

南山大学で2008年6月に開かれた「宗教と社会」学会第16回大会のテーマ・セッション「宗教心理学を考える」は、宗教学的宗教心理学と心理学的宗教心理学という区分を考えることをテーマとして設定されたものである。企画の趣旨によると、この二つの宗教心理学の差異と共通点をそれぞれの領域

での研究成果の発表をめぐって明らかにすることを意図したとされている。

このテーマセッションは、宗教学的宗教心理学からと心理学的宗教心理学からの4研究発表および心理学、宗教学、宗教社会学の立場からの指定討論によって構成されている。筆者は心理学の指定討論者としてこのセッションに参加する機会を与えられたので、パーソナルな視点からのこのセッションについての印象を述べることにする。

研究発表は、西脇の大学生を対象とした調査結果を除くと具体的なデータの分析やその考察を取り上げたものではなく、概念的な水準での考察を内容とするものであった。こうしたことによるのか、二つの宗教心理学における研究成果を比較して検討するような論議はなく、たがいに並行した発表に終わっている。また指定討論者の発言もまた同じように相互にすれ違いのままであった。このような場で対立する立場から活発な討議がなされるというのは我が国では極めて珍なことであるので、このような並行状態はむしろセッションの順調な進行を示したものと見ることもできるかもしれない。

このテーマセッションが大会最終日に、それも「宗教の社会的貢献活動」という宗教研究者に興味深く思われるセッションと並行して開かれたにもかかわらずかなりの人数の

参加者を集めたことは宗教心理学と呼ばれる領域に対する宗教研究者の関心の強さを反映しているように見受けられる。しかしながらフロアーからの発言のほとんどが宗教学者の側に集中したのは、この学会への参加者の背景を考えると当然かもしれないが、心理学的視点からの研究や論議がこれらの人々には縁となく、理解が難しかったのではないかとも考えられる。心理学の立場に属するものとして振り返ると、研究成果を他の学問領域の研究者に理解できるような形で提供することに努めて、共通な論議の場を築くことが必要であろう。

二つの宗教心理学間の関係に話を戻すと、この主題が直接的に話題になることはなかったが、宗教学と心理学がともに実証的な科学であるならば共通に基盤とするものが存在していることになる。この共通性を出発点とした交流の場を生み出すことが可能のはずである。松本は二つの宗教心理学は研究対象とする「宗教」現象にアプローチする方向の違いであることを指摘している。宗教という複雑で多面的な現象を研究対象としたときにはさまざまな方向からの接近が可能となるのは当然のことである。

このように考えると多様な視点から知見や理論を集め、体系化する試みの中に統合への妥当な可能性が存在するのであろう。

テーマセッション指定討論概要および若干の感想

深澤英隆(一橋大学)

筆者は、宗教学の立場からのコメントを、ということで参加したが、もとより宗教学という一枚岩の立場があるわけではない。いずれにせよ宗教心理学研究の非当事者として、気がついたことをいくつか述べさせて頂くこととなった。

宗教学的宗教心理学と心理学的宗教心理学の分裂状況を確認するとともに、両者の協同を模索するとこの本セッションの主題設定は、宗教心理学をめぐる実情を反映したものであるとして、適切であったと思われる。もっともこの対立は、近代における人間科学の方法論の長い対立をも背景にしており、調停は必ずしも容易ではない。また私見では、両者の間には、心理学の側は、宗教学のプレ科学性を疑い、宗教学の側は、心理学のいわばプレ・ポスト実証主義性を疑う、という緊張の構図があるように見える。

おのおの問題点についてみれば、まず心理学的宗教心理学について言えば、その中心的な方法原理である操作主義と量化にもとづく方法への不満が、どうしても宗教学の方にはある。仮説検証型を中核とする実証主義の研究手続きが、往々にして問題設定も限定的で、結果も目覚ましい発見にはなかなか結びつかない点はもどかしい。私見によれば、以下の点が疑問として残る。心理的な測定対象を、観測不可能な、しかし客体的事実と考え、それを行動的・量的指標へと対応させる際に、その操作レベルで

の言語や論証の整合性や一義化(「科学化」)は確かに達成しうる。しかし指標と、想定された対象(心的事象)の指示・対応関係の不定性は、それによって減じることはなく、また心的現象の存在性格が、より明確になるわけでもない。そこでは単に研究共同体での合意が達成されただけだとも言える。また少数のパラメーターを切り離し、本来構造的(行為連鎖、解釈、慣習等々)な人間行動のごく一部のパラメトリックな研究に終止してしまうきらいがある。これが集積されて構造解明に行き着くという予測があるかもしれないが、パラメーター化そのものの難点は、量的に集積されても解消しない。

他方で、宗教学的宗教心理学はどうか。宗教学的な研究は、量的に対する質的なもの、というのではなく、様々な話題領域と方法・準方法の集積である。この点は、堀江氏の卓抜な整理の通りと思われる。宗教学的宗教心理学のほうも、自己を統一的学科とはおよそ考えず、そうなるつもりもない。ただどのような話題領域や方法に関わるにせよ、多彩な宗教学的宗教心理言説に、自己の言説身分についての反省(知識社会的、科学論的)がしばしば欠落しているのは確かであろう。ポスト実証主義を標榜しつつ、プレ実証主義的な恣意性と、基礎づけられない断片的・疑似実証の真理請求が共存しているのが実態とも言えなくもない。

そもそも「宗教心理」の身分は両義的であ

る。宗教心理や宗教経験の非日常性や特異性は、実証科学にとっては、その固有実在性をより容易に疑わしめた(より容易に「消去主義」になじみやすかった)。他方で、宗教意識や宗教心理は、心性の還元や消去に終極的に逆らう何かとして、超越に通じる心のコアとして、近代宗教思想により語られてきた。実際、心理学的宗教心理学は、宗教心理のこの微妙な位置づけゆえに、科学性を求めてより操作化に傾いたのであり、他方で、宗教学的宗教心理が近代宗教哲学の延長上にあることは明らかである。

さて、ここにあらたなスピリチュアリティなる心理学的対象概念が出現した。しかしまず、この概念の身分がはっきりしない。使用当事者の語用論的分析なのか、あるいは心的現象に関わる対象指示概念なのか。言語-意味経験なのか、あるいは心的状態性を意味するのか、といった点が曖昧なままに議論が進むことが多い。さらに、このスピリチュアリティとの関連で、心的なものの実体化というメンタリズムの問題に宗教心理学はどう対応するのか、という問いが先鋭化する。つまりスピリチュアリティの措定は、当事者にも研究者にも、新たなメンタリスティックな実体主義の余地を与えているかに見えるのである。セッションの発表でも、やはりメンタリスティックな響きないし語法が往々にして感じられた。近代宗教思想は、素朴な宗教フォークメンタリズムを哲学化した。(宗教)心理学はその延長上にあるとも言える。現代社会でのスピリチュアリティの語られ方も、やはりメンタリスティックな民衆心理学的

ルーティーン表現となっている。これに研究者の側はどう対応するのだろうか。理論的な問題であるとともに、心理概念の作用的遂行性を考えると、実践的介入の問題でもある。もちろんメンタリズム問題、心的現象の身分問題は、解決のつかない心の哲学に関わる問題である。しかしかつての行動主義的消去主義はともかくとしても、近年の言説的アプローチやヴィトゲンシュタンの流れからのメンタリズム批判は、考慮に入れる必要がある。現在心理学をも深く侵蝕しつつある社会構成主義からすれば、さまざまな心理的状态概念は、内部的属性ではなく、社会関係のなかでの意味づけにほかならないことになる。これまでメンタリズムは、量的指標化に関して語られてきたが、実際には質的研究も同様の対象言語を語りかねない。メンタリズム批判をも含意するナラティブターンを、宗教心理学はどう生かすのか。主客の相互性、意味構築・物語作業における対象と研究者との同一地平性と、そのなかでの心理学者としての自己差異化はどのようになされるか。

ふたつの宗教心理学の一ディシプリンへの統合は、不可能ないし不必要であろう。そもそもそのための理論的基礎を提供するはずの人間科学や心の哲学が、四分五裂の状況である。しかし、ある種の話題領域、フォーラムとしての「宗教と心理」という場を設け、相互に反省性を深めてゆくことは、きわめて有意義であるに違いない。そのなかで、科学／非科学の境界設定問題(ポパー)も、あらためて考察されてゆくことになるだろう。

宗教心理学研究会テーマ・セッションに参加して

中野美加(同志社大学大学院神学研究科)

学会2日目、朝の9時半からという時間設定にもかかわらず、「宗教心理学を考える」というシンプルなタイトル(シンプルですが、学会の性質上、多くの方が普段なんとなく興味を持っておられたのだと思います)に惹かれてか、多くの方が来場してくださり、熱心に耳を傾けておられたのがまず印象に残っています。実際、壇上から発せられるセッションの中身も非常に豊かで内容が濃く、私には珍しく(!)、ほとんど休憩なしの9:30~12:30の間、集中力が途切れませんでした。というか、ちょっとでも集中が途切れるとついていけなくなりそうでした。あまりに充実した午前中だったため、午後からエスケープしてしまっただけです。

この日一番興味深かったのは、研究方法についての議論でした。研究(対象)への視点の違いを感じて、人間科学(博士課程前期)から、神学(博士課程後期)に鞍替えした私にとって、この二年半ずっと悩んでいるのが、この研究方法の問題です。還元主義に陥らず、客観性を欠いた弁証論にも陥らない方法を、今も模索中といってもいいのかもしれません。この日、発表者の発した言葉の中で、「トップダウン」と、「ボトムアップ」両方の視点が必要だというのがありましたが、今のところ私がぼんやり行き着いたことに一番近く、共感しました。神学と現場の乖離の問題は、内部から宗教を扱う学問には常について回ることです。キリスト教神学でもご

多分にもれずで、当たり前すぎて問題視もされてないかもしれません。しかし、日本のキリスト教信者の死生観を扱おうとしている私にとっては、小さくない問題なのです。

私の扱うテーマの場合、「トップダウン」はすなわち組織神学の研究方法でのアプローチという事になろうかと思えます。たとえばインタビューを取るなら、教派を絞って教職者を中心にフィールドワークするというのが順当な方法と思われれます。しかし信徒が何を考えているかを、実のところ教職者、神学者たちは知らないのです。信徒のいないキリスト教など考えられませんかから、そこに「ボトムアップ」の研究することに意味が出てくると思えます。ところが日本のキリスト教会の場合、そもそも「教派」の違いの存在すら知らない信者(特に1世)が多いのです。その中で教派別にインタビューを取るという時、どんな仮説を想定したらいいのか正直言ってわかりません。なんだか愚痴みたいになってしまいました。

今回の学会では、初日に発表して自分の方向性をかなりはっきりさせる事ができました。そして二日目にセッションに参加して、宗教心理学の抱える問題の多さに眼のくらむ思いもしましたが、学際的な領域を専攻に選んだ者は、常にチャレンジャーでなければという思いも新たにすることができました。セッションに参加できた事に、感謝しています。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第9号が発行されました。今回の内容は、6月に開催された国際シンポジウム、「宗教と社会」学会第16回学術大会テーマセッションについての報告となります。諸般の事情により、それぞれの会についての報告はいたしませんでした。その分、通常の感想よりも負担が多い形になってしまいますが、執筆者の方々に発表内容をまとめていただく形をお願いいたしました。執筆された方々に改めて御礼申し上げます。

今後、さらにニューズレターを充実したものにしていきたいと思っておりますので、ぜひ第9号に関するご感想をいただければ幸いです。また、ニューズレターへの寄稿もお待ちしております。

(K.M)

【宗教心理学研究会の今後の予定】

2008年11月

宗教心理学研究会ニューズレター第10号(第6回研究発表会報告および感想)の原稿依頼
第7回研究発表会(日本心理学会第73回大会ワークショップ) テーマ・発表者の提案・検討

2009年1月

日本心理学会第73回大会ワークショップ申し込み

2009年3月

宗教心理学研究会ニューズレター第10号発行(予定)

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良 [rnishiwk@ps.nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/